



「桜の花さくころ」

高橋桐矢

薄紅色の桜の花は、どれもひかえめに下を向いて咲きます。やわらかな花びらはすきとおるほど薄く、近くで見るとほとんどもう真っ白なのでした。

緑色の羽のメジロが、くちばしの先を花心の奥にさしこみました。

「ああ、甘い。この季節だけのごちそうだ」
つぶやいて、次の花にうつります。

メジロは、次々と、花の蜜を飲みました。
その間、花びらの一枚も、こぼれることはありません。

スズメだったら、桜の花ごとがつがつとつ

いばむでしよう。だから、スズメが甘い蜜のごちそうをいただいたあとには、桜の花が柄ごとぼとり、ぼとりと地面に落ちていきます。メジロは、そんな下品な食べ方はしないのでした。

メジロは、枝の先で、ふと立ち止まり、下を見下ろしました。

キツネが一匹、桜の木を見上げていました。手も足も細くやせていて、しっぽの毛がところどころ抜け落ちていきます。

キツネの金色の目が、きらりと光り、メジロは、ぶるつと体をふるわせました。

次の日も、その次の日もキツネは、桜の木の下にきていました。

ひらり、ひらりと、桜の花びらが舞い始めました。

キツネが、桜の木を見上げました。

「メジロさん。おたずねします。わたしの友達を知りませんか？」

突然声をかけられてメジロは、びっくりしました。でも礼儀正しい問いかけだったので、礼儀正しく答えました。

「いいえ、知りません」

キツネがためいきをついたように見えました。メジロはあわてて、一言つけくわえませんでした。

「お友達がどうかしたんですか？」

キツネは、顔を上げました。

「この桜の花がさくころ、また会おうって約束したんです」

どこか遠くを見るような目で、

「もう、いないのかもしれないね」

おだやかな口調でしたが、声には悲しみがにじみでていました。

メジロは、あたりを見まわしました。キツネとメジロのほかには誰もいません。ただ

桜の花が、甘い蜜をたたえて、さいているばかりです。

何か言っただけだと思いましたが、なんと声をかけていいのかわかりません。

キツネが腰を上げました。あばらが浮き出たやせた体です。

桜の花をおしむように見上げて、キツネは、メジロにたずねました。

「そちらも何か、おさがしですか？」

メジロは首をかしげましたが、すぐにはと思いましたが、桜の花のひとつひとつをのぞきこむように、くちばしをさしこんで蜜を飲んでいたので、何か探しているように見えたのでしよう。

メジロは、桜の花の柄を、くちばしでくわえてひっぱりました。

柄ごと、花がぼとりと地面に落ちました。

キツネは、不思議そうに落ちた花を見えています。

「キツネさん、桜の蜜をのんだことがありますか？」

「いいえ。いちども」

メジロは、一段下の枝にとびうつりました。

「それじゃあ、その桜の花を食べてごらんさい。甘い蜜があじわえますよ」

キツネは、ちよつとだけ首をのぼし、桜の花に鼻を近づけ、においをかぎました。そ

れから、ぱくりと口をあけ、桜を食べました。

メジロは、じつとキツネの顔を見ていました。

キツネは、目を閉じました。

「ああ、本当だ。ほんのり甘い」

メジロは、うれしくなつて、羽をふるわせました。

地面に落ちるのは、あわい紅色の花びらばかりで、蜜の入った花ごと落ちることはなく、キツネが背伸びしても桜の花までとはどきません。

もちろん、桜の花をひとつふたつ食べても、キツネの腹が満たされることはないでしょう。でも、甘くかぐわしい蜜は、ほんの少しのなぐさめにはなるかもしれせん。

メジロは、ふたつ、みつつと桜の花を落としました。

ぱくり、ぱくりとキツネが食べます。

毎日、キツネは桜の木の下にやつてきました。たえまなく舞い落ちる桜の花びらの下、やせたキツネは、かるやかにおどるようにはねまわりました。

桜の花がもう残りわずかになったある日。

「メジロさん、ありがとう」

キツネに言われて、メジロは、照れながら答えました。

「いいえ、どういたしまして。キツネさん、また来年、桜の花がさくころ、ここで会いましょう」

キツネの目がすうつと細くなり、大きな口でにつこり笑ったように見えました。

「そうしましょう。桜の花がさくころに」

「ええ、きつと」

メジロは、もう一言「わたしたちは友達ですよね」と付けくわえたのですが、はずかしくて言えませんでした。

そのとき、強い風がふいて、桜の花びらの最後のひとひらまで、ふきとばしてしまいました。

やがて緑の新芽がのびはじめました。

夏の日差しをあびて、桜の木は、いっばいに葉を茂らせました。秋風が吹くようになると、桜の葉は、赤く色づいてきました。

そして長い冬の間、桜の木はすっかり葉を落として、じっと待っていました。春が来るのを。

花芽がふくらみ、薄紅色のつぼみが、少しずつ開いていきます。

おだやかに晴れた日、桜は、一輪目の花をさかせました。

また桜の花がさいたのです。

その枝には、あのメジロがいました。

メジロは、まだつぼみが目立つ枝をながめながら、目を細めました。「ようやく咲いた。キツネさんとの約束のときがきた」

枝をつたって、開いた花に近づくと、ほのかに甘い香りがしました。まだキツネは来ていません。

メジロは、桜の花にそつとくちばしをさしこんで蜜を飲みました。

次の日も、次の日も、キツネは来ませんでした。

桜の木の枝から枝へ、飛びうつりながら、メジロはキツネを待っていました。

とうとうある日、桜の木の下に、黄色いけものが近づきました。

はっとしてメジロは、目を向けましたが、あのキツネよりずっと若い、違うキツネです。

若いキツネは、はらはらと舞い落ちてきた花びらを、めずらしいもののように見上げています。

メジロは、思い切って、キツネに呼びかけてみました。

「キツネさん、ちよっとおたずねします」

キツネはくりくりと丸い目を、メジロに向けました。急に話しかけられて、びっくりしているようです。

メジロは、もう一段、下の枝にうつってからたずねました。

「わたしの友達を知りませんか？」

若いキツネは、ほんのちよっとだけ、首をかしげました。

「いいえ、知りません」

「桜の花がさくころ、会おうって約束したんですが」

あのキツネは、やせて、しっぽもばさばさ、ずいぶん年をとっているように見えました。もうどこかで死んでしまったのかもしれない。

メジロを見上げて、若いキツネは、丸い目をまたたきました。もう一度首をかしげ、それから、きちんと座り直して口を開きました。

「お友達と会えるといいですね」

しずんだ心が、ぼっとあたたくくなるような言葉です。

メジロは、思い立って、桜の花の枝をくちばしでつまみました。柄ごと、花がぼりと地面に落ちました。

「キツネさん、よかったです、その花を食べてみてください。甘い蜜が入っていますよ」
若いキツネは、目をかがやかせ、花に近づきました。あのキツネがそうしたように、鼻先でにおいをかいでいます。

「ぼくの友達は、桜の花をおいしい、おいしいって食べてくれたんです」
メジロの言葉に、若いキツネは口を開き、桜の花をぱくつと食べました。
味わうようにかんで飲みこみ、ゆっくりと顔をほころばせました。

「本当だ。甘い」

メジロは、ぷるつと羽をふるわせて、

「そうでしょう、そうでしょう」

と、また桜の花をつついて下に落としました。

見上げるキツネのしつぽが、ふわりとゆれました。

キツネは、桜の花が地面につく前に、ぱくりと口で受け止めました。

「キツネさん、お上手ですね」

メジロは、枝から枝へとびうつり、花を落としました。

若いキツネは、おどるように身軽に、花を受け止めるのでした。

次の日も、次の日もキツネはやってきました。

あたたかい日が続き、桜の花はあつというまに満開になり、はらはらと散り始めました。

ふぶきのように舞い落ちる花びらの中、キツネがメジロを見上げます。

「メジロさん、もうすぐおしまいですね。また来年、桜の花がさくところに、会いませんか？」

花びらが、後から後から、舞いおりていきます。

メジロは、こみあげてくる気持ちをおさえて、こたえました。

「ええ、桜の花がさくところに。きつと」

そして、今度はためらわずにつづけて言いました。

「わたしたちは、友達ですよね」

キツネは一瞬、きよとんとした顔をして、それから、にっこりと笑みをうかべました。「ええ、もちろん」

風が最後の花びらをふきとばしていききました。

緑の葉がしげる夏になり、さわやかな秋とりんとつめたい冬が過ぎて、また次の春がやってきました。

ほころびかけた桜のつぼみを、毎日見上げているけものがいました。
あの若いキツネです。

花が咲き、枝が少しずつ薄紅色にそまっっていくのを、キツネは毎日見上げていました。メジロがやってくるのを待っているのです。

ちらと、枝を走るかげが見えましたが、メジロではありませんでした。
キツネは、辛抱強く、毎日、桜の木の下に通いました。

桜が開いて、二日経ち、三日過ぎると、花びらがひらりひらりと落ちてくるようになりました。もちろん、花がぼとりと落ちてくることはありません。

桜の花を見上げるキツネを、木の上から呼び止めるものがいました。

「キツネさん、いったい何をさがしているんですか？」

声をかけてきたのは、小さなヤマネでした。鼻先のひげをひくひくと動かしています。

キツネは、前足をそろえてすわりました。

「友達をさがしてるんです。ぼくの友達を知りませんか？」

ヤマネは、きよろきよろとあたりを見まわしてから小さな声でこたえました。

「知りません」

「そうですか。ありがとうございます」

きつねは、立ち上がろうとして、ふとつぶやきました。

「ヤマネさんも蜜を飲むのかな」

かさかさつと枝をつたう音がしました。

キツネが見上げると、さつきより一段下の枝にヤマネがいました。

「キツネさんも蜜を飲みに来たんですか？」

「いいえ。ぼくはとどかないから」

キツネが返事しおえないうちに、ヤマネが歯でくわえて、桜の花を落としました。

「よかったら、どうぞ」

キツネは、落ちた桜の花と、枝のヤマネを交互に見ました。

やっぱりヤマネも、桜の蜜を飲んでいたので。キツネは、小さな友達のことを思い

出して、胸が熱くなりました。

「ありがとう」

キツネはばくりと花を食べました。

なつかしい味がしました。メジロのように花の蜜だけを飲めば、きつとさぞかし甘いのでしよう。

でも桜の花ごと食べると、ほろにがい青草のような、しぶい、にがい味がしました。ほんの一瞬かすかな甘みがあるだけで、それほどおいしいものではありません。

キツネは、桜の花をぐくりと飲みこんで、枝の上のヤマネを見上げました。

「うん、甘い！」

キツネの言葉に、小さなヤマネは、顔をぱつとかがやかせました。

それから、桜の花がさいている間、ヤマネとキツネは、毎日、桜の木にやってきました。桜の花びらが、ふぶきのように舞い散っていきました。地面はもう、一面、薄紅色にそまっています。

キツネは、ヤマネを見上げて言いました。

「ヤマネさん。また桜の花さくところに会いましょう」

小さなヤマネは、顔をかがやかせ、しつぽをいっぱいにふくらませました。

「ええ。そうしましょう。きつと、きつと」

「きつと、きつとね」

キツネがくりかえします。

ヤマネは、小さな手を組み、うっとり夢見るように言いました。

「桜の花さくころに」

優しくなでるような風に、最後まで枝の先に残った花びらが、はらり、はらりと舞いおりていきました。